児教連 児教連創立五十周年 浄土宗教化の最前線

浄土宗児童教化連盟（三宅明信理事長）では二月六日に総本山知恩院の和順会館地下ホールで創立五十周年記念式典と懇親会を開催した＝写真。

開会の挨拶で三宅理事長は、「児教連は昭和四十五年に活動を始めた。現在は三千三百名を超す大きな組織となったが、活動は必ずしも順調とは言えない」と述べ、謙虚な反省の言葉は注目された。

「私は七百五十年遠忌の年、天草のお寺で小学校の入学式を迎えたが、父は知恩院に行き二ヶ月帰ってこなかった。母は御遠忌に団参を連れて京都に行き、入学式に私の両親はいなかった。両親のいないのは私だけであった。そのとき私は、知恩院にくし、お念仏にくしであった。その後、昭和三十七年に大映映画の『釈迦』が封切になった。それで私は仏教に興味を抱くようになった。児教連は現在、会員は三倍になったが活動は弱くなった。大変僭越ではありますが、葬式仏教に頼らない青少年教化の活性化を求めたい。五十周年の所感を述べて開会の挨拶にします」と。

来賓祝辞で豊岡宗務総長は「理事長先生のお話を承り昭和三十五、六年に教師養成講座を受けていた頃を思い出し懐かしく初心に帰りました。児教連は昭和四十五年に創立されましたが、その頃、岸信宏御門主、稲岡覚順宗務総長が健在であったと思います。現代は少子高齢化、葬儀無用論などと言われていますが、児教連の活動は大変貴重なものであり、大いに期待しております」と述べた。

また知恩院の大崎順敬執事は「私は五十七歳で五十年前のことは存じませんが、学生時代から児教連の活動には参加しております。上宮高校の大先輩である作家の司馬遼太郎さんの『二十一世紀の君たちへ』という文章を読み、仏の子ども達を育てる児教連のお仕事の大切さを思い、あらためて活躍をお祈りします」。東北地方教化センターの中村瑞貴宮城教区長は「先代の中村真道が児教連の理事長を務めたという縁でお招き頂いた。先代の前の理事長は松涛基道先生でした。私も仏の子を育てようという児童教化では鍛えられた。邁進しなければならないと思う。ひざを折って子供の目線で考えなければならない」と述べた。